



TITLE:

黃遵憲と日本漢詩

AUTHOR(S):

蔡, 毅

CITATION:

蔡, 毅. 黃遵憲と日本漢詩. 中國文學報 2006, 71: 50-77

ISSUE DATE:

2006-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177973>

RIGHT:

黃遵憲と日本漢詩

蔡

毅

南山大學

黃遵憲（一八四八—一九〇五）は清朝末期の「詩界革命」の代表作家として、これまでずっと學界から重視されてきた。しかし、彼が清朝光緒三年（明治十、一八七七）末から光緒八年（明治十五、一八八二）に至るまで初の清朝駐日公使館の參贊を務めた四年餘りの間に生じた日本漢詩との種々の関わりは、今なお全面的な研究がなされていない^①。すなわち、黃遵憲はどれほどの日本漢詩作品を閱讀し、どのような認識と評價をしたのだろうか？彼は明治の日本漢詩壇にどのような影響を與えたのだろうか？と同時に、彼自身、明治の漢詩からも何らかの啓示を得たことがあるのだろうか？これらの問題は、みな一步進んだ考察が待たれている。本稿は、上述の諸問題について、特に第三點のい

わゆる「フィードバック」に重點をおいて、それぞれ探究を試みたい。

一

黃遵憲は清末における傑出した詩人として、初めて國境を越えて、海を隔てた日本という異郷で、本場の中國と源を同じくする漢詩の奇葩を發見したとき、その興趣がかきたてられたことは言を俟たない。そもそも、彼は外交官の使命を擔い、中國の日本に對する認識の空白を補おうとし、『日本國志』およびその副産品である『日本雜事詩』を執筆したので、日本の歴史・文化を理解するために、日本漢詩も自然と彼の視野に入ってくる。それゆえ、黃遵憲が日本に滞在した期間に日本漢詩と多く接觸し、そして彼なりの評價をした。その最もまとまった見解は、『日本雜事詩』第七六、七七首及びその自註である。

觀風若採扶桑集 觀風 若し扶桑集を採らば
壓卷先編侍宴詩 壓卷 先づ侍宴詩を編む

讀盡凌雲兼麗藻
終推帝子獨工辭

讀み盡くす凌雲と麗藻

終り推す帝子の獨り辭に工みなり

と

自注：詩始於大友皇子「侍宴」詩、曰：「皇明光日月、帝德載天地。三才並泰昌、萬國表臣儀。」殊有天地開闢、日月重光氣象。總集之編有「扶桑集」、「懷風藻」、「凌雲集」、「本朝麗藻」、「經國集」。延喜、天曆之間、稱鬱鬱乎文矣、然未有專集。其後能以詩鳴者、曰新井君美（著有「白石詩稿」、梁田邦美（字景鸞、號蛻巖、江戸人、有「蛻巖文集」、祇園瑜（字伯玉、號南海、紀伊人、有「南海集」、秋山儀（字子羽、號玉山、豐後人、有「玉山詩集」、「玉山遺稿」、菅晉師（字禮卿、號茶山、備後人、有「黃葉夕陽村舍詩稿」、賴惟柔（字千祺、號杏坪、安藝人）、賴襄、梁孟緯（字公圖、號星巖、美濃人、有「星巖集」、廣瀬建（字子基、號淡窓、□□人、有「遠思樓詩鈔」、皆名家也。

自注：詩は大友皇子の「侍宴」詩に始まる、曰く「皇明光くこと日月のごとく、帝德載すること天地のごとし。三才並びに泰昌、萬國臣儀を表す」と。殊に天地開闢、日月重光の氣象有り。總集の編に「扶桑集」、「懷風藻」、「凌雲集」、「本朝麗藻」、「經國集」有り。延喜、天曆の間、鬱鬱乎として文

黄邊憲と日本漢詩（蔡）

なるに稱す、然れども未だ專集有らず。其の後能く詩を以て鳴る者は、曰く新井君美（著に「白石詩稿」有り）、梁田邦美（字は景鸞、號は蛻巖、江戸の人、「蛻巖文集」有り）、祇園瑜（字は伯玉、號は南海、紀伊の人、「南海集」有り）、秋山儀（字は子羽、號は玉山、豐後の人、「玉山詩集」、「玉山遺稿」有り）、菅晉師（字は禮卿、號は茶山、備後の人、「黃葉夕陽村舍詩稿」有り）、賴惟柔（字は千祺、號は杏坪、安藝の人）、賴襄、梁孟緯（字は公圖、號は星巖、美濃の人、「星巖集」有り）、廣瀬建（字は子基、號は淡窓、□□の人、「遠思樓詩鈔」有り）、皆な名家なり。

豈獨斯文有盛衰
旁行字正力橫馳
不知近日雞林賈
誰費黃金更購詩

豈に獨だ斯文に盛衰有らんや
旁行の字 正に横馳に力む
知らず近日 雞林の賈
誰か黄金を費やして更に詩を購は

ん

自注：詩初學唐人、於明學李・王、於宋學蘇・陸、後學晚唐、變爲四靈。逮乎我朝、王・袁・趙・張（船山）四家最著名、大抵皆隨我風氣以轉移也。白香山・袁隨園尤劇思慕、學之者十八九。（唐時有小野篁慕香山、欲游唐。小說家稱人見

海上樓閣、道以待白香山來、殆即日本也。』『小倉山房隨筆』亦言雞林賈人爭市其稿、蓋販之日本、知不誣耳。七絕最所擅場、近市河子靜（號寬齋、上毛人）、大窪天民（號詩佛、□人、有『詩聖堂集』）、柏木昶（字永日、號如亭、信濃人、有『晚晴堂集』）、菊池五山（字□□、□□人、有『五山堂詩話』）、皆稱絕句名家。文酒之會、援毫長吟、高唱往往遍唐宋近世文人、變而購美人詩稿、譯英士文集矣。

自註：詩は初め唐人を學び、明に於いては李・王に學び、宋に於いては蘇・陸に學び、後に晚唐に學び、變じて四靈と爲す。我が朝に逮びては、王・袁・趙・張（船山）の四家最も著名にして、大抵は皆な我が風氣に隨ひ以て轉移するなり。白香山・袁隨園は尤も劇しく思慕せられ、之に學ぶ者十に八九。（唐の時小野篁有りて香山を慕い、唐に遊ばんと欲す。小説家の稱するに、人の海上樓閣を見て、以て白香山の來るを待つと道う、殆ど即ち日本なり。）『小倉山房隨筆』も亦た雞林の賈人爭ひて其の稿を市うと言う、蓋し之を日本に販るならん、誣せざるを知るのみ。七絕最も擅場とする所は、近くは市河子靜（號は寬齋、上毛の人）、大窪天民（號は詩佛、□□の人、『詩聖堂集』有り）、柏木昶（字は永日、號は如亭、信濃の人、『晚晴堂集』有り）、菊池五山（字は□□、□□の人、『五山堂詩話』有り）、皆な絶句の名家と稱せらる。文酒の會、毫を援りて長吟し、高唱すること往往にして唐・宋に

逼る。近世の文人、變じて美人の詩稿を購ひ、英士の文集を譯せり。

上に引用した文字には、白抜きマスや個別の誤植があるが、これはすべて原文に依る。この他、『日本國志・學術志』『爲詩詞之學者』の部分で列舉された作家は、上述の自註と相重なり合う部分もある。

この二首の詩及び自註は、前者が日本漢詩全體の概況を要約したものとすれば、後者は日本漢詩の進展變化に重きをおいていると言える。問題は、黃遵憲がここに述べた日本漢詩に對する理解は、一體どれ程の水準だったのであろうか？ これをよく吟味すると、前者はわずかに作家作品の羅列に止まるばかりで、理論的な概括分析はされていないので、深く問わなくてよい。後者は注目に値するのは、ただ「詩は初め唐人を學び、明に於いては李・王に學び、宋に於いては蘇・陸に學び、後に晚唐に學び、變じて四靈と爲す。我が朝に逮びては、王・袁・趙・張（船山）の四家最も著名にして、大抵は皆な我が風氣に隨ひ以て轉移す

るなり。」の一句のみである。しかし、日本漢詩の歴史に照合してみれば、この概述は時間を基軸とする詩風の流れにはあまり符合せず、むしろその詩風變化の平面的な散點素描の一種であると言えよう。特にその中の「變じて四靈と爲す」の一語は、最も難解である。「四靈」がもし南宋後期の江湖詩派に近い「永嘉四靈」、すなわち浙江永嘉出身の四人の詩人、徐照・字は靈暉、徐玠・字は靈淵、趙師秀・字は靈秀、翁卷・字は靈舒を指すものとすれば、日本漢詩史においては彼らが特に青眼を受けていたという記録はないものの、自註は特に市河寛齋を代表とする江戸後期の江湖詩社の同人に注目しているので、この「四靈」はじつは南宋の江湖詩派を意味し、借りて日本の同じ名前の詩社を指したかもしれないと筆者は考える。これに関連しては、ほかに「四靈」は市河寛齋が主催した江湖詩社の四大弟子である大窪詩佛、柏木如亭、菊池五山、及び自註には取り上げられていない小島梅外ではないかとする意見もあり、その根拠は柏木如亭の詩に「四靈復聚舊江湖」〔四靈復た聚る舊江湖〕という一句があることによる。しかし、

黄遵憲と日本漢詩（蔡）

この日本版の「四靈」は柏木如亭が詩の中でたまたまそう言っただけで、未だ文壇の通稱にはなっておらず、黄遵憲がその内情を知っていたかどうかは、なお疑問である。ただし、註の「皆稱絕句名家。文酒之會、援毫長吟、高唱往來逼唐、宋」の一句は、ひよっとすると由來があるかも知れない。江戸後期に出版された『今四家絶句』には、市河寛齋、柏木如亭、大窪詩佛、菊池五山など四人の七言絶句が各百首収録されていて、巻頭の因是道人の序言ではこの四人を「豎に稱して」唐宋八大家及び「横に稱して」南宋四大家の范成大、陸游、楊萬里、尤袤らと比較し、四人は後者と大いに似ていると認めている。同時に、文の中で三度も「一時唱酬」を用い、「其の名並びに隆なり」、「其の名並びに齊なり」、「其の名並びに高し」を使い分け呼應させた。^③黄遵憲の自註に照らしてみると、彼はこの序言に留意したのではないかと思われる。

しかし、おおよそ同時期に作られた兪樾の『東瀛詩選・自序』が日本漢詩に對して高い見地から巨視的に把握した「二變三期説」をうちだしているに比べて、黄遵憲の認識

は明らかに浅いもので、まとまっていない部分が多い。

『日本雜事詩』第六九、七五首及びその自註、さらに『日本國志・學術志』で道學家・古文家の著述を一々列舉した細かさと紙數の長さからは、彼の日本漢學に對する基本的態度——その文を賞するがその詩を賞せず——を見出すことが出来るだろう。

實は、上述の漢詩人の作品および彼が羅列したその他の漢文著作は、黃遵憲が本當に通覽したかどうか、大いに疑問である。彼の『日本雜事詩』の創作は、かつて多くの日本の友人から助けを受けていた。例えば、黃遵憲は光緒五年（一八七九）三月、宮島誠一郎に送った書簡でこう述べている。

德行自藤惺窩、文章自物徂徠以下諸公、乞條其名字、籍貫、所著之書、一一以告。漢學宋學又當分別、文章則文與詩亦分舉爲妙也。^④

德行は藤惺窩自り、文章は物徂徠自り以下の諸公、乞ふ其の名字・籍貫・著する所の書を條し、一一以て告げよ。漢學宋學は又た當に分別あるべし、文章は則

ち文と詩も亦た分けて舉ぐるを妙と爲すなり

彼は大河内輝聲と筆談したときも、「以文章名世者」「文章を以て世に名ある者」を示すように請い、「專集多未見、選本中曾見其六、七」「專集多くは未だ見ず、選本中曾て其の六、七を見る」と言明した。^⑤これによれば、上に引用した『日本雜事詩』の自註は、恐らくその多くは他人が提供した資料のままに寫し取っただけで、自ら研究した後に判斷したわけではない。黃遵憲の日本漢詩に對する見解を見るに、その『日本國志』の編纂方針とびつたり合う。すなわち「厚今薄古」であると言えよう。彼が眞劍に閱讀し、積極的に評價したのは、殆どが同時代の人の作品、或は世を去ったばかりの江戸後期の作家たちである。上に引用した第七六首自註末尾の最初の原稿には「至於近世、尤解吟事」「近世に至りて、尤も吟事を解す」の一句があり、何年も後に定稿した時に削除されてはいるが、そこから黃遵憲の當時の認識を見ることが出来る。彼は『明治名家詩選序』の中ではつきりとその原因を分析した。

自余隨使者東來、求其鄉先生之詩。卓然成家、寥落

無幾輩。而近時作者、乃彬乎質、有其文。余嘗求其故、則以德川氏中葉以後、禁網繁密、學士大夫每以文字賈禍、故囁嚅趨起、幾不敢操筆爲文。維新以來、文網疏脫、捐棄忌諱、於是人人始得奮其意以爲詩。^⑦

余 使者に隨ひ東來せし自り、其の郷先生の詩を求む。卓然として家を成すは、寥落として幾輩も無し。

而れども近時の作者、乃ち質に彬たり、其の文有り。

余 嘗て其の故を求むれば、則ち德川氏中葉以後、禁網繁密にして、學士大夫毎に文字を以て禍を賈すを以て、故に囁嚅趨起し、幾ど敢へて筆を操り文を爲さず。維新以來、文網疏脱にして、忌諱を捐棄し、是に於いて人人始めて其の意を奮つて以て詩を爲すを得たり。

もちろん江戸後期はこのようにまったく人々が皆沈黙して物を言わなかったというわけではなく、先に引用したように黄遵憲が賞讃した市河子靜（寬齋）を代表とする江湖詩社は、この時期の翹楚でもあり、次に觸れる賴山陽は更に卓然として一頭地を抜く優れた人物であつた。黄遵憲が極端な言い方をする目的は、維新がもたらした詩壇の newly

い様相を際立たせるためであろう。彼のこのような見解は、本稿第三章で論ずる彼と明治の「文明開化新詩」との關連においても、決して無關係ではない。

黄遵憲は日本漢詩について、本音のところは實は相當嚴しかつたが、二人の日本漢詩人に對しては彼は讚辭を惜しまずに譽めそやした。それが賴山陽と龜谷省軒である。

賴山陽（一七八〇—一八三三）、名は襄、字は子成、號は山陽、三十六峰外史、著に『山陽詩鈔』、『山陽遺稿』、『日本外史』、『日本政記』等あり、江戸後期の最も名高い漢學者である。彼は黄遵憲が來日する四十餘年前に既に亡くなつていたにもかかわらず、そのユニークな史論によつて、明治期になつてもとても流行してゐた。黄遵憲『日本雜事詩』第七五首の「徂徠而外有山陽」「徂徠ありて外に山陽有り」は、二百首の詩の中で唯一作家の名前を擧げた詩句である。その他の文章或は筆談中に、およそ賴山陽に言及すれば、彼はいつも肅然として敬意を表して「山陽先生器識文章、僕謂日本蓋無流匹」^⑧「山陽先生の器識文章、僕謂へらく日本に蓋し流匹無し」という。しかし、詩と比べて、彼は更

に賴山陽の文を稱え、「詩不如文、然自有一種不可磨滅之精神、未易及也。」^⑨「詩は文に如かず、然れども自ら一種の磨滅すべからざる精神有り、未だ易くは及ばざるなり。」と、最も評價しているのが賴山陽の「器識」と「精神」であることが分かる。彼はかつてこう言っている。

若使山陽在今、必當遍歷中土及歐米、必能各捨短而擇其長。僕爲山陽惜者在此。區區詩文、猶未也。^⑩

若し山陽をして今に在らしむれば、必ず當に中土及び歐米を遍歷し、必ず能くおのおの短を捨て其の長を擇ぶべし。僕 山陽の爲に惜しむ者は此に在り。區區たる詩文は、猶ほ未だしなり

最も破格の扱いは、黃遵憲が繰り返し賴山陽を「典故」と爲すことである。その『續懷人詩』第八首「絕勝海風三日夜、拿舟空訪沈南蘋」「絕勝の海風三日夜、舟を拿し空しく訪ふ沈南蘋」の自註に、「昔畫師沈南蘋客長崎、賴山陽聞其名走訪之、阻風三日夜、及至、而南蘋已歸、以爲平生恨事」^⑪、「昔、畫師沈南蘋は長崎に客し、賴山陽は其の名を聞き之を走訪し、風に阻まれること三日夜、至るに及び、南蘋已に歸る、

以て平生の恨事と爲す」とあり、彼と宮島誠一郎が互いに往來している親密な間柄と對比させている。宮島の『養浩堂詩話』に寄せた序文にも、彼は再び賴山陽を引き合いに出してこう喩えた。

昔江辛夷一客耳、賴子山陽至度越阡陌遠往長崎、待之九十日、卒以阻風、船不果至、空結遐想。余才雖不逮古人、而比之古人爲辛良多。^⑫

昔、江辛夷は一客なるのみ、賴子山陽は阡陌を度越し遠く長崎に往くに至る、之を待つこと九十日、卒に風に阻まるるを以て、船至るを果さず、空しく遐想を結ぶ。余の才は古人に達ばずと雖ども、之を古人に比べれば幸と爲すこと良に多し。

このような日本人の故事に對する「用典」は、日中漢詩交流史上滅多にないものであり、特筆に値すると思う。

龜谷省軒（一八三八—一九一三）、名は行、字は子省、號は省軒、著に『省軒文稿』、『省軒詩稿』等あり、明治政界において活躍し、漢學に精通していた。黃遵憲は龜谷とよく交遊し、彼に對する敬意をまったく隠していない。「於

詩最愛龜谷省軒」〔詩において最も龜谷省軒を愛す〕、「僕來此、

最欽慕者、龜谷子一人」〔僕ここに來て、最も欽慕する者は、

龜谷子一人のみ〕。彼はさらに龜谷に『日本雜事詩』を添削し序を作るよう懇請した^⑬。彼が龜谷に特別に期待を寄せた理由は、龜谷の詩藝の今後の進展を豫見していたからである。

足下古詩大可成家、數今日之所造詣、既非餘子所能及矣。^⑭

足下の古詩、大いに家を成すべし、今日の造詣する所を數うるに、既に餘子の能く及ぶ所に非ず。

後で論及する日本漢詩人の古體詩における拙さを鑑みるに、黃遵憲は龜谷省軒に對して心から大きな期待を持つていただろう。

要するに、黃遵憲は日本に滞在した期間、『日本國志』の編纂に傾注し、多くの漢文史籍を重要視したのみならず、詩人としての天性によつても、日本漢詩に大きな關心を寄せたのである。その文集に見える言葉を拾っていくと、私たちは彼の独自の鋭い視線を感じることができる。

黃遵憲と日本漢詩（蔡）

二

黃遵憲の日本漢詩に對する親近感は、主に相互の文化を同じものだと考えることから來ている。彼は歐米を遊歷した後、宮島誠一郎に書簡を送つて、これらの「表海の雄風、決決たる大國」で見聞を廣めたとは言え、やはり隔たりを感じ、知音を覓めるのは難しかったと言っている。

然以論朋友游宴之樂、山川風物之美、蓋不逮日本遠甚、僕竟認並州作故鄉矣。春秋佳日、舉頭東望、墨江之櫻、木下川之松、龜井戸之藤、小西湖之柳、蒲田之梅、瀧川之楓、一若裙屐雜沓、隨諸君子觴詠於其間、風流可味。以是知我兩國文字同、風俗同、其友好敬愛出於天然、豈碧眼紫髯人能比並乎？^⑮

然れども以て朋友游宴の樂、山川風物の美を論ずるに、蓋し日本に逮ばざること遠く甚だし、僕竟に並州を認めて故郷と作せり。春秋佳日、頭を擧げて東望すれば、墨江の櫻、木下川の松、龜井戸の藤、小西湖の柳、蒲田の梅、瀧川の楓、一に裙屐雜沓、諸君子に隨

ひ其の間に觸詠するが若く、風流味はるべし。是を以て我が兩國の文字同じく、風俗同じく、其の友好敬愛は天然に出づると知る、豈に碧眼紫髯の人能く比並する所ならんか？

そして、日本漢詩人と心が通じ合うのは、お互いが慣れて役立つ筆談によるものであると詩に詠んでいる。

舌難傳語筆能通

舌 語を伝え難く筆能く通ず

筆舌瀾翻意未窮

筆舌瀾翻として意未だ窮まらず

無作佉盧蟹行字

佉盧の蟹行の字を作す無く

一堂酬唱喜同風^⑮

一堂酬唱して風同じきを喜ぶ

この獨特の「文字の縁」は口語で通じないという障害をなくし、黃遵憲を明治の日本漢詩壇に上がらせ、思う存分技量を發揮させた。當時駐日使館のスタッフのうち、黃遵憲は三十歳を過ぎたばかりだったが、才能が最も優れていて、このため日本の學者に最も歓迎された。王韜は『日本雜事詩序』で、當時多くの人が黃遵憲を取り巻いて持ち上げ、引きも切らずといった盛況を描寫した。

日本人士耳其名、仰之如泰山北斗、執贄求見者戶外

屢滿。而君爲之提唱風雅、於所呈詩文、率悉指其疵謬所在。每一篇出、群奉爲金科玉律。此日本開國以來所未有也。

日本の人士其の名を耳にし、之を仰ぐこと泰山北斗の如し、贄を執り見を求むる者戶外に屢は滿つ。而して君は之が爲に風雅を提唱し、呈する所の詩文に於いては、率ね悉く其の疵謬在る所を指す。一篇出る毎に、群奉じて金科玉律と爲す。此れ日本開國以來未だ有らざる所なり。

石川鴻齋も『日本雜事詩跋』で彼が「入境以來、執經者、問字者、乞詩者、戶外屢滿、肩趾相接、果人人得其意而去。」「入境以來、經を執る者、字を問ふ者、詩を乞ふ者、戶外に屢は滿ち、肩趾相ひ接し、果して人人其の意を得て去る」と言う。ここに最新版の『黃遵憲全集』に收録されている彼が日本人のために書いた序跋及び評語などを次のように並べ、その日本での活躍ぶりをうかがおう。

一八七八

跡見花蹊輯『彤管生輝帖』に『滿庭

芳』詞を題す

一八七八、六

『頼山陽書翰』に跋文

一八七八、一一

兒玉士常『中學習字本』に序文

一八七九、二

淺田宗伯『先哲醫話』に跋文

一八七九、三

石川鴻齋『文章軌範』に序文

一八七九、一〇

宮島誠一郎『養浩堂詩集』に跋文

一八七九、一二

蒲生重章『近世偉人傳』第四編に書後

一八八〇、一

岡千仞詩に評語

一八八〇、四

蒲生重章『近世偉人傳』に題詞

一八八〇、四

また宮島誠一郎『養浩堂詩集』に跋文

一八八〇、六

さらに宮島誠一郎『養浩堂詩集』に跋

文

一八八〇、六

岡本監輔『萬國史記序』に評語

一八八〇、六

淺田宗伯『仙桃集』に序文

一八八〇、七

岡千仞『與某論冉求仲由書』に評語

一八八〇、八

城井國綱編『明治名家詩選』に序文

一八八〇、七

岡千仞『藏名山房集』に序文

一八八一、四

淺田宗伯『牛渚漫錄』に序文

一八八一、五

安井息軒『讀書餘適』に序文

一八八一

岡千仞『北遊詩草』に序文

一八八一、七

宮島誠一郎『養浩堂詩集』に序文

一八八一、八

『斯文一斑』第七集に評語

一八八一、八

『斯文一斑』第八集に評語

一八八一、九

『斯文一斑』第九集に評語

一八八一

蒲生重章『近世偉人傳』に題詞

一八七八—一八八一

蒲生重章『聚亭詩鈔』に評語

一八七八—一八八一

藤川三溪『春秋大義』に序文

一八七九—一八八一

青山延壽『皇朝金鑒』に序文

一八七八—一八八一

生田水竹『畿道巡迴日記』に序文

一八七九—一八八一

『送佐和少警視使於歐洲序』に評語

一八七九—一八八一

『愛國叢談序』に評語

一八九九、一二

副島滄海『孔子詩』に跋文

さらに彼と色々な人たちとの日常交際をも見てみよう。

黄遵憲自ら言うに「遵憲來東、士夫通漢學者十知其八九。」¹⁹⁾

「遵憲は東に來たり、士夫の漢學に通じる者は十に其の八九を知

る。」筆者の統計に基づくと、『黃遵憲全集』の記録で彼と交流があつた明治の人士だけでも、七十九人にのぼる。

ページ順に列挙すれば、石川鴻齋、宮本鴨北、有棲川熾仁親王、重野成齋、巖谷六一、日下部東作、蒲生重章、岡鹿門、穴戸磯、小野湖山、秋月種樹、佐野雪津、伊藤博文、榎本武揚、淺田宗伯、大沼枕山、南摩綱紀、龜谷省軒、青山延壽、森春濤、鱸元邦、森槐南、宮島誠一郎、鶴田嫩姪、鶴田元縞、關義臣、内田九成、原章清風、大河内輝聲、畊南仙史、増田貢、川田甕江、城井錦原、跡見花蹊、小森澤長政、兒玉士常、藤川三溪、生田水竹、副島滄海、中村敬宇、金子彌平、井上子徳、宮島大八郎、松井強哉、谷山之忠、高木正賢、池田寛治、加藤櫻老、内邨綏所、手塚壽雄、木原元禮、小山朝弘、杉村武敏、松平慶永、有馬道純、植樹家壺、山田則明、宮部襄、川島浪速、向山黃邨、曾根俊虎、高谷龍州、石幡貞、栗木鋤雲、本多正訥、三浦安、中川雪堂、伊地知正治、谷干城、荻原西疇、勝海舟、吉井三峰、吉井友實、古賀謹一郎、税所篤三、菊池溪琴、長岡護美、大久保利加、中村確堂などの名がある。もしその上に

有姓無名或いは有名無姓の人および交流があつたが記載に見られない人を加えと、数は更に多くなるだろう。

黄遵憲が明治の漢學界でこのように禮遇を受けたことは、實は特殊な歴史背景がある。一方では、先の江戸の鎖國時代、日本漢詩人は海を隔てた西の大陸を眺めるだけで行くことができなかった。やむを得ず、本來中國ではごく普通の商人であつた長崎で往來する人々を、彼らの競つて付き合う對象として、いささか直接教えを受けられない「本場」人士への渴きを潤すわけで、江辛夷（芸閣）らのたぐいがにわかに高名を得た理由はここにあつたのである。明治の初め、黄遵憲のように教養豊かで外交官出身という本格的な文人の到來は、まるで空谷の足音のようで、漢詩人たちは自ずと一齊に彼に追隨し、恭しく弟子の禮をとるようになった。他方では、維新以後、西學が盛んに行われ、傳統的漢學は脅威を感じ始め、危機意識は日増しに深まつた。宮島誠一郎は黄遵憲にこう言つた。「今敝邦詩道大衰、因閣下撓正、欲興起此風、所以有寸心也。」（今敝邦の詩道大いに衰ふ、閣下の撓正に因りて、此の風を興起せんと欲す、寸

心有る所以なり。」黄遵憲は「謹當如命。」「謹しんで當に命の如かるべし。」と答へ、當然ながらこの傾いた大勢を再び挽回することを自己の責任としている。

このようになると、ぞくぞくとやってきた教えを請う原稿が机に積まれてしまい、黄遵憲は常にてんてこ舞いの忙しさで、時には仕方がなく旅行休暇を利用してこの業務外の仕事に取り掛かるほどであった。ある日、宮島が彼に添削を催促したら、黄遵憲はこう答えた。「入今年來、他人文稿積凡案者如山、都以箱根了此一切文字債也。」「蠅堂詩留此過久、慚愧之至。並攜往箱根了之。並其他友人之作、約有二十餘本。箱根無事、數日中能盡了之也。」^{②1}「今年に入りてより、他人の文稿凡案に積む者山の如し、都て箱根を以て此の一切の文字の債を了らせるなり。」「蠅堂の詩此に留まること過ぎて久し、慚愧の至りなり。並びに攜へて箱根に往きて之を了らせん。並びに其の他の友人の作、約そ二十餘本有り。箱根に事無し、數日中に能く盡く之を了らせるなり。」「その多忙さがうかがえる。しかし、この大量の「作文指導」の中で彼が最も心血を注いだのは、やはり宮島誠一郎の『養浩堂詩集』で

ある。

宮島誠一郎（一八三八—一九二一）、字は栗香、號は養浩堂、明治政府において要職を歴任し、黄遵憲が在日中最も密接に交流した友人である。現存するその二人の筆談と書簡においては、話題の中心が作詩に終始し、正に黄遵憲が『養浩堂詩集序』で言うように、一年の四季は「未嘗不相見、相見未嘗不談詩」「未だ嘗て相ひ見ずんばあらず、相ひ見れば未だ嘗て詩を談ぜすんばあらず」だった。この詩集のため、彼は「既爲之校閱四五過、復系以評語疊千萬言。」^{②2}

「既に之が爲に校閱すること四五過、復た系するに評語疊千萬言を以てす。」であった。力を盡くし、また付け足すものはないと言つても過言ではない。これと同時に、彼は厳しくチェックする態度をとり、友人としての情の面からやや寛容になることはせず、批評はあまりにもきついので、ひいては「或以爲過刻」^{②3}「或いは以て過刻と爲す」と心配する人もあった。例えば、削除訂正に著手したばかりのとき、彼はすぐに宮島に書簡を送った。

大稿經一再讀過。此二本殊少佳作、披沙揀金、偶一見

寶耳。謬以鄙見、輒爲刪棄。其餘未動筆者、僕皆以爲可刪、然未敢自信、冀吾子更請他人閱之耳。狂妄之罪、不敢求諒。惟恃至愛、乃敢出此言也。²⁴

大稿一再讀過を経る。此の二本殊に佳作少なく、沙を披して金を揀べば、偶たま一寶を見るのみ。謬りて鄙見を以て、輒ち刪棄を爲す。其餘未だ筆を動かざる者、僕皆な以爲へらく刪るべし、然れども未だ敢へて自ら信ぜず、冀はくは吾子更に他人に之を閲するを請ふのみ。狂妄の罪、敢へて諒を求めず。惟だ至愛を恃み、乃ち敢へて此の言を出すなり。

その他にも諄諄と各種の作詩要訣を告げ、ひいては具體的にある語句をいかに直すべきかと指示するなど、枚舉にいとまがないのである。

黄遵憲の宮島誠一郎への一つ一つ導く教え方は、彼が明治漢詩壇に對して一種の模範を示していると思なすといひと思われ。その多くの評語から、われわれは彼の日本人の作詩技巧に對する不滿を見ることが出来る。主なものはいくつある。

一つは古體詩に堪能ではないこと。彼は宮島を「足下七古似稍遜一籌、揣足下未及多讀也」[足下の七古や一籌を遜するに似たり、揣るに足下未だ多讀に及ばざるなり]と批判し、並びに彼に「多讀李、杜、蘇三家」[多く李、杜、蘇三家を讀め]と助言した。²⁵ 菊池溪琴の詩を「骨氣極好」「骨氣極めて好し」と讃えるときも、また「至其長篇、時有劍拔弩張、不勝其力之態」[其の長篇に至りては、時に劍拔弩張すれど、其の力に勝へざる態有り]と嘆き惜しんだ。²⁶ 岡千仞が彼に「弊邦能詩人唯限律絕句。往時、江稼圃來長崎之日、觀邦人古詩概爲失體、概不之見。果然否?」[「弊邦の詩を能くする人、唯だ律絶句に限る。往時、江稼圃長崎に來たるの日、邦人の古詩概ね體を失するを觀て、概ね之を見ず。果たして然るや否や?」]と問うたとき、黄遵憲は即座大いに贊同して「謂日本古詩概失體、此太高之論。」[日本の古詩概ね失體と謂ふは、此れただ高き論なり。]と答えた。²⁷ たとえ彼が絶えず褒めてゐる賴山陽であつても、岡千仞がその「古風長古」は「不知中華矩度否」[「知らず中華の矩度に中れるや否や」と尋ねたとき、彼もはつきりと「詩不如文」[「詩は文に如か

ず」と答えた。實は、同じような指摘は、既に中國で『東瀛詩選』を精選した一代の大儒である俞樾の筆に見られるし、日本に來て『日本同人詩選』を編集した不遇の文人である陳曼壽の口からも出ており、これが當時の中國文人の日本漢詩に對する共通の認識であつたことが分かる。

不滿の二つめは音律に習熟していないこと。漢語に暗いまま漢詩を詠むことは、日本漢詩人のそもその弱點である。黃遵憲はこれに深く感ずるところあつたため、ある時自ら吟誦して、漢詩音韻の眞の魅力を見せ付けた。「今我讀詩、諸君試聞。讀詩皆如此。音節好否？」^②「今我詩を讀む、諸君試みに聞け。詩を讀むは皆な此の如し。音節好きや否や？」彼は宮島の息子に詩を學ぶことについて指導したときも、

「漢字一字只有一音、日本每有餘音、須去其餘音乃似。歸爲令郎言之。」^③「漢字一字に只だ一音有る、日本毎に餘音有り、須べからく其餘音を去りて乃ち似たり。歸りて令郎の爲に之を言へ。」と、細かく教へ導いており、並み大抵の苦心ではない。

概して言うと、黃遵憲は日本漢詩に、或は日本漢文學全

黃遵憲と日本漢詩（蔡）

體の缺點に對して、一つの總括的な「忠告」を持っていた。

僕之蓄於胸中未告人者、曰日本人之弊：一曰不讀書、一曰器小、一曰氣弱、一曰字冗、是皆通患、悉除之、則善矣。^④

僕の胸中に蓄へて未だ人に告げざる者は、曰く日本人の弊。一に曰く書を讀まず、一に曰く器小さく、一に曰く氣弱く、一に曰く字冗なり、是れ皆な通患、悉く之を除けば、則ち善からん。

遺憾なのは、この後日中關係が急轉直下惡化——すなわち戰爭をして、黃遵憲はついに彼が期待していたこの共同文化が結んだ「善」果を見ることができなかったことである。

三

黃遵憲は日本漢詩に對して「先生」としていろいろ評價・指導する一方で、彼自身も逆に「學生」から何らかの影響を受けただろうか？この問題に關して、今まで疑問をもった者は誰もいなかった。中國詩人が日本漢詩人を前に

し、遠い昔から代々ずっと傳わる正統性を自任して、先生としての巨大な光環に包まれるうち、弟子たちはおとなしく言う通りにするだけで、少しも口出しをする餘地がなかった。どこに「フィードバック」を論じる暇があるだろうか？しかしながら、黄遵憲自身において、我々はかえつて「教えと學びは相い長ず」と稱するに足る、隠れたそして明らかな、種々の痕跡を見ることが出来る。本章はすなわち、この特別な現象を試みに探究するものである。

明らかな事實としてまず考えられるのは、黄遵憲の『日本雜事詩』が多くの日本學者に教えを請うて完成したことである。彼は宮島誠一郎への書簡で、何度も「想既改削」、「復承賜閱」、「乞盡一夕工夫削之」③、「既に改削せんと想う」、「復た閱を賜るを承はる」、「乞ふ一夕の工夫を盡くして之を削らん」ということに觸れ、増田貢への書簡でも、自身が「以外國人述大邦事」「外國人を以て大邦の事を述べん」として、何か不備なところがあるうかと恐れているので、「懇懇指正」④「懇懇と指正されよ」と依頼した。増田貢も遠慮せず、返信して「向賜『雜事詩』卷、閱之玉石混淆、冠履齊列」

「向^ききに『雜事詩』卷を賜る、之を閱するに玉石混淆、冠履齊列たり」と言い、婉曲に批評を示した。黄遵憲が光緒十一年（一八八五）に作した『日本雜事詩自序』では、また「日本名宿若重野成齋（安繹）、岡鹿門（千仞）、青山鐵槍（延壽）、蒲生子闇（重章）諸君子皆手加評校、丹黃爛然、溢於簡端」、「餘爲之易稿者四」「日本の名宿重野成齋（安繹）、岡鹿門（千仞）、青山鐵槍（延壽）、蒲生子闇（重章）の若き諸君子、皆な手づから評校を加へ、丹黃爛然、簡端より溢る」、「餘之が爲に稿を易へること四たび」で、初めて完成したと言っている。

しかし、『日本雜事詩』は多方面にわたって日本の學者から協力を得てはいるものの、これは主に日本の史實について訂正してもらつたためだったという特殊な背景を考慮すれば、それと黄遵憲の日本漢詩人に對する一般的な指導とを並べて論じることは勿論できない。もし我々は『日本雜事詩』の修訂を一種の例外とみなし、検討しないことにすれば、筆者が更に興味を感じるのは、黄遵憲が自ら提唱・實踐した「詩界革命」は、明治期に風靡していた「文明開化新詩」の影響を受けなかったのだろうか、ということ

ある。

周知の通り、黄遵憲は清末「詩界革命」で最も顯著な功績があつた人物である。その新體詩の大きな特徴は、すなわち梁啟超が言うには「能熔鑄新理想以入舊風格」〔能く新しき理想を熔鑄して以て舊き風格に入る〕ということである。彼が使節として英國に駐在する時に書いた『今別離』四首、つまり汽船鐵道、電報、寫眞と東西半球の時差を詠じた代表作は、當時すぐに詩壇の大家たちから口をそろえての稱讃を得た。陳三立はこれを評して「以至思而抒通情、以新事而合舊格、質古淵茂、隱惻纏綿、蓋闢古人未曾有之境、爲今人不可少之詩。」〔至思を以て通情を抒し、新事を以て舊格に合し、質古淵茂、隱惻纏綿、蓋し古人未曾有の境を開き、今人に少くべからざるの詩を爲る〕と。この他、黄遵憲が「百年過半洲遊四」^④と、そのおびただしい日本・米國・歐洲での體驗を表現した詩篇も、漢詩の領域の新境界を切り開いたと評價されている。陳衍の『石遺室詩話』が言うに「中國與歐美諸洲交通以來、持英蕩與敦槃者、不絕於道。而能以詩鳴者、惟黄公度。其關於外邦名蹟之作、頗爲夥頤。」^⑤「中

國は歐美諸洲と交通して以來、英蕩と敦槃を持つ者は、道に於いて絶たず。而して能く詩を以て鳴らす者は、惟だ黄公度のみに。其の外邦の名蹟に關する作は、頗る夥頤と爲す。」と。

なるほど、上述の評價をもしただ中國の詩史に照合するだけでも、黄遵憲は確かにそれだけの價值がある。しかし、我々が視野を広げて目を東アジア漢字文化圈全體に向けるならば、また別の景觀が見えてくる。黄遵憲が日本に赴任するより早く、日本の漢詩人たちはすでに維新の際に西洋の學問が押し寄せて流入してきた時流を受け繼ぎ、西洋文明の新しい事物、新しい語彙を傳統的漢詩の形式に取り入れるよう率先して試みた。明治以後、鎖國が解け、漢學の素養のある日本文人は自ら海外へ赴くことができるようになり、かつては書物を通してしか思いを馳せることができなかった外の世界を見て、その新鮮な感動を漢詩に詠み綴った。多くの中國大陸漫遊の詩作はともかく、明治六年（一八七三）成島柳北が歐米を周遊して歸り、その『航西雜詩』に描寫した西洋の異郷風情は、すでに先鞭を付けている。明治八年（一八七五）森春濤が編輯した『東京才人

絶句」は、明治初期に詠まれた「文明開化」の代表的成果を集めている。川田甕江の序が言うに「昔者詠物、花鳥風月、而今則石室電機、汽車輪船。耳目所觸、無一非新題目。」「森翁此編、作詩史讀、可也。即作文明史讀、亦無不可。」³⁹。「昔の詠物は、花鳥風月、今は則ち石室電機、汽車輪船。耳目の觸るる所、一として新しき題目に非ざるは無し」。「森翁此編、作詩史讀、可也。即作文明史讀、亦無不可。」「森翁此の編、詩史と作して讀むこと、可なり。即ち文明史と作して讀むこと、亦た不可無し。」その詩題と内容の例を挙げると、次のようになる。

航西雜詩	「倫敦」等を詠ずる	成島柳北
夏日病中作	「中外新聞」等を詠ずる	鈴木蓼處
橫濱雜詩	「瓦斯燈」等を詠ずる	關根癡堂
雜詠十題	「女學校」等を詠ずる	藤堂蘇亭
贈新聞記者某	(題の如し)	鈴木半雲
博覽會	(題の如し)	八木萃堂

……

森春濤はこの年に創刊し、かつ主編する漢詩文雜誌『新

文詩』で、毎月一回發行のペースで「清新」を標榜する漢詩の近作を出し續けた。この雜誌は、もともと維新の渦中であつて「獨守舊業」「獨り舊業を守る」、すなわち漢詩の活動の場を堅守することを宗旨としていたが、一方、その『新文詩』という命名が實は「新聞紙」の發音にかけたしゃれであるように、時に應じて變ることもできる柔軟性を兼ね備え、既に落伍した漢詩という文學ジャンルに「文明開化」の新風を吹き込んだために、「化腐爲新、工亦甚矣」⁴⁰「腐を化して新と爲し、工は亦た甚だし」と川田甕江が稱するまでになった。阪谷朗廬は更にこれを「吾家吟壇新聞紙」、「新聞紙示勸戒於新話、而新文詩放風致乎新韻、皆新世鼓吹之尤者」⁴¹「吾が家吟壇の新聞紙」「新聞紙は勸戒を新話に示し、新文詩は風致を新韻に放つ、皆な新世鼓吹の尤なる者」と贊した。次に『新文詩』から數例を拾つて、彼らがどのように「新韻」で「新世鼓吹」をしたのか見てみよう。

鈴木蓼處『題風船圖』 風船の圖に題す

西人技術亦奇哉 西人の技術も亦た奇なる哉

舟在青空盡溯洄 舟は青空に在りて盡く溯洄す

見得謫仙詩句是

見得たり謫仙の詩句は是なるを

孤帆眞個日邊來^④

孤帆 眞に日邊より來たり

この詩は想像あり、情韻ありで、典故の利用もちようどよいので、明治漢詩の代表作と見なされ、様々な選集に入選された。しかし、その反面、西洋の文明を鵜呑みにして、うまく溶け込まず、通じがたい作品があるのもやむをえない所である。例えば芳川越山の『明治九年十二月設海底線於阿波州、竣工有作』〔明治九年十二月海底線を阿波州に設け、竣工して作有り〕は

非因要害礙樓船

要害に因りて樓船を礙するに非ず

一鎖投來萬信傳

一鎖投來して萬信傳ふ

休道相思南北隔

道うを休めよ相思 南北に隔たる

と

偷從海底兩情牽^⑤

偷かに海底從り兩情 牽す

詩の前半は頗る稚拙で、あまり文雅とはいえないが、後半で電線が戀の思いを渡し届ける役割を稱揚するのは、科學技術の力を借りて傳統的な遊子思婦の題材を扱うという點において、黃遵憲の『今別離』が友情を遙か彼方から送

る電報を禮贊するのと、相通じるであろう。

森春濤は『新文詩』を據點としてこの漢詩の新潮を育てただけではなく、彼自身も時々筆を揮って、手本を示した。彼が明治十四年（一八八二）六月新潟旅行の出發前、友人杉山三郊は序を作って彼に送り、新潟の地は

西洋各國亦爭輻湊、於是火輪之船、電機之線、山水人物、殆有與昔時異觀者、而從未嘗見有豔筆描其形勝、寫其風俗者、豈不昌平一大遺憾乎哉？歲之辛巳夏六月、春濤森先生將啓新潟之行、賦詩曰：此行要問今風俗、吾意將翻古竹枝。^⑥

西洋各國も亦た争ひて輻湊し、是に於いて火輪の船、電機の線、山水人物、殆ど昔時と異觀の者有り、しかるにかねてより未だ嘗て豔筆もて其の形勝を描き、其の風俗を寫す者を見ざるは、豈に昌平の一大遺憾ならざるや？ 歳の辛巳夏六月、春濤森先生將に新潟の行を啓かんとして、詩を賦して曰く：此の行もし今の風俗を問わば、吾が意は將に古き竹枝を翻さんとす。と稱した。『春濤詩鈔』に收められている『新潟竹枝』の

一組の作品は、傳統的情調が依然として詠唱の主役であるが、「鐵輪」、「火井」、「郵箋」、「巨艦」、「人力車」など新しい名詞も同時に筆端に現れている。^⑤「古き竹枝」で「今の風俗」を描いたのは、正に當時の漢詩壇で流行した一種の氣風である。

最も集中した例證は、黃遵憲が日本に赴任する直前、明治十年（一八七七）八月上野博覽會が開幕した時、『新文詩別集』第九號が特集專號『上野博覽會雜詠』として、その詩題に全て直接に展示品そのものを掲げたことである。順を追つて示せば、制糸機器、穀種、礦種、漆器、陶器、釀造品、織造品、文房三具、寫眞翁媼匾額、寫眞女子匾額、洋法書匾、盆松となつてゐる。和と洋が色々並べられて壯觀であり、新時代の息吹が傳わつてくる。當時の詩壇の泰斗である小野湖山はこれに對して鋭い論述をしており、彼は松岡穀軒の『上野公園博覽會開場……』詩をこう評した。

事新、則字面亦不得不新。能用新字面以作穩雅詩、非穀軒翁決不能也。^⑥

事新たなれば、則ち字面も亦た新たならざるを得ず。

能く新しき字面を用ひて以て穩雅の詩を作る、穀軒翁に非ずんば決して能はざるなり。

ここでの「能く新しき字面を用ひて以て穩雅の詩を作る」は、陳三立が言う「新事を以て舊格に合す」、梁啟超が言う「能く新しき理想を熔鑄して以て舊き風格に入る」と示し合わせたようによく似てゐる。湧き立つような勢いの西洋文明の波に直面して、東アジアの漢字文化の子孫たちが代々傳わる家寶を何とか守るために書かれた處方箋は、なんとこのように期せずして一致しており、實に味わい深いことである。

黃遵憲が日本に到着した後も、この漢詩壇の高揚は依然として増すことはあつても衰えることはなかつた。『新文詩』第三〇集の卷末に載せられた「皆笑社月課文題」を見ると、明治十一年（一八七八）詩社の毎月の共同課題は、四月は「氣球船喻」、八月は「電線說」であり、慣例の櫻と月の觀賞ではない。新奇を追ひ求める氣風が盛んな様はここからも見る事ができよう。そしてこの一年は正に黃遵憲が明治漢詩人との交流を廣げた重要な年であつた。

以上述べたことをまとめれば、黄遵憲が日本に赴く以前及び在日期间において、日本漢詩壇は『新文詩』を中心として、「文明開化」の風を吹かせていた。「采風問俗」の「古の小行人、外史氏」を自任していた黄遵憲は、この古典詩歌の王國が前代未聞の巨大な變化に直面しているのを、どうして見逃し、全く無關心でいられようか。

さらにこれを論じれば、我々は、黄遵憲と明治の「文明開化新詩」との間に確かに種々の直接或は間接的關連があったと言えるだろう。氣風の新驅けである森春濤を例にとれば、黄遵憲は彼と深い交流があった。明治十一年（一八七八）清國公使何如璋がわざわざ森春濤を訪ねたが、森はその事を詩に作り、黄遵憲が次韻しており、しかも詩題の下に「翁翁素工香奩、戲仿其體」⁴³「翁翁素より香奩に工みなり、戯れに其の體に仿ふ」と。來日してわずか一年で、森の詩風や嗜好をはつきりと分かつており、實際の親密さがうかがえる。さらに黄遵憲が森春濤個人宛に送った書簡は、次々と『新文詩』第五、五七、六二集に掲載され、その中では春濤の息子森槐南が作った戲文『補春天

傳奇』への指導にも觸れているから、父子二代ともに誼を通じていたことになる。黄遵憲がこの特別な關係により、『新文詩』雜誌及び森春濤が編集や執筆したその他の詩作を目にとめたのも不思議はないだろう。森父子にとどまらず、黄遵憲にとっては前述した「文明開化新詩」にかかわりがあった小野湖山、川田薨江等の人物も皆よく杯を交わす友人であった。なお、前文で述べた彼の盛名を慕って教えを請うた多くの人々も、きつと常に「文明開化」を著した詩篇を抱えていただろう。しかも黄遵憲は『日本雜事詩』と『日本國志』を執筆する際、當時の新聞雜誌によく目を通し、掲載された漢詩文はもとより言うまでもなく、たとえ日本語の「新聞紙布令」があつても、自ら「然僕觀之、不譯亦知其事也」⁴⁴「然れども僕これを觀るに、譯さずとも亦た其の事を知るなり」と言つた。このため、彼が目にすることができた大量の日本文獻の中でも、明治「文明開化新詩」という芽生えたばかりの新鮮な露がまだついている詩壇の奇葩は、きつと彼に強い興趣を引き起こさせたに違いない。

實際、黃遵憲は在日期間、この種の新體詩にすでに手を染めていた。『日本雜事詩』第五三、一七五、一七八、一八一首は新聞紙、照像、博覽會、人力車を詠んでいて、彼がこの題材に手慣れていて思い通りに扱っていることを窺わせる。『日本國志』では、日本人が新しく創り出した歐文譯語、いわゆる「和制漢語」は、さらにいたるところで見られる。しかし、『日本雜事詩』は敘事的な大型の組詩であり、黃遵憲が言う最初に書いた目的は、「僕東渡以來、故鄉知友郵筒雲集、輒就僕詢風俗、問山水、僕故作此以簡應對之煩」⁵⁰「僕東に渡りて以來、故郷の知友郵筒雲集し、輒ち僕に就きて風俗を詢ね、山水を問ふ、僕故に此を作りて以て應對の煩を簡にす」であり、専ら何らかの新奇な事物を對象とする、すなわち傳統意義上での「詠物」の作品とはやはり違いがあるのだ。ここで我々はもう一つ別の角度から、黃遵憲が舶來文明を漢詩に取り入れようとした積極的な態度を見てみよう。

明治十一年（一八七八）出版の石川鴻齋が編集した『芝山一笑』は、清國駐日副使張斯桂の「觀輕氣球詩」が收録

されていて、この「泰西氣球新樣巧」「泰西の氣球新樣巧みなり」の新奇な事物に對して、作者は心から感歎している。石川鴻齋自身も一首『戲次其韻』と和して、その詩中でこう言っている。

聞說洋人始新制 聞くならく洋人 新制を始め
圖敵瞰營施奇計 敵を圖り營を瞰て奇計を施す
或歷宇內檢廣狹 或いは宇内を歷し廣狹を檢し
又閱輿地極微細 又た輿地を閱して極めて微細なり
この石川の詩に對し、黃遵憲は次のように評している。
奇思異想、眞入非非。亦廣大、亦精微、是不可思議功德也。⁵¹

奇思異想、眞に非非に入る。亦た廣大、亦た精微、是れ不可思議の功德なり。

黃遵憲が日本に來る前の同治九年（一八七〇）に作った『香港感懷』の中ですでに「氣球」に觸れており、『人境廬詩草』で用いられた新語の中では、これは最も早い例だと言つてよい。同じく氣球を詩に詠んだ張斯桂は、「心地尙若少年、意欲縱觀天下奇形怪狀一切事情」⁵²「心地尙ほ少年

の若く、意は天下の奇形怪狀、一切の事情を縦に觀ぜんと欲す」と自稱した好事家でもあり、彼の『使東詩錄』は、「東京女子師範學校」、「幼稚園學校」等の新しい事物を取り上げた作品を収めているが、「和竹添鴻漸贈詩原韻」の詩は、更に當時の色々な「神器」に禮贊をした。

飛車碾鐵雷聲動（火輪車路） 飛車 鐵を碾き雷聲動

馳傳聞鐘電氣通（電線信局） 馳傳 鐘を聞き電氣通

公使何如璋も同様にこの類の話題に並びにならぬ關心があり、その『使東雜詠』第五六首に詠んだ「電氣報」にこうある。

柔能繞指硬盤空 柔は能く指を繞り硬は空を盤る
路引金繩萬里通 路に金繩を引きて萬里通ず
一掣飛聲逾電疾 一たび飛聲を掣ふれば電疾を逾え
爭誇奇巧奪神工 爭ひて奇巧を誇りて神工を奪ふ

自注：電氣報以銅爲線、約徑分許、用西人所煉電氣。或架

黃遵憲と日本漢詩（蔡）

木上、或置水中、引而伸之、兩頭以機器繫之。所傳之音、傳線以行、雖千萬里頃刻可達。

自注：電氣報は銅を以て線と爲し、約そ徑は分ばかり、西人煉する所の電氣を用る。或いは木上に架し、或いは水中に置き、引きて之を伸ばし、兩頭機器を以て之を繋ぐ。傳する所の音、線を傳して以て行き、千萬里と雖ども頃刻にして達すべし。

公使・副使をはじめ、清國使館ではつねにこの類の「新詩」の具體的實踐があつた。何如璋は黃遵憲及び日本人と共同唱和した中で、既に當時最もモダンであつた電話を題として詠んだ。

近西人有電器名德律風、足以傳語、故以此爲戲
近ごろ西人に電器有り、名は德律風、以て語を傳ふるに足る、故に此を以て戲を爲す
何須機電詔神通 何ぞ須く機電神通を詔すべけんや
寸管同摻用不窮 寸管同じく摻して用 窮まらず
卷則退藏彌六合 卷けば則ち退藏して六合を彌え
好揚聖教被殊風 好く聖教を揚げて殊風被ふ

黃遵憲自身もいたずらに傍觀していたわけではない。

『戊寅筆話』によれば、大河内輝聲が新しく買った「洋傘」に詩を書いていて、黄遵憲も請われて一首を題した。

黄はそこで「戲作四言銘」を作った。

亦方亦圓、隨意蕭然 亦た方亦た圓、隨意に蕭然

朝朝暮暮、可以游仙 朝朝暮暮、以て游仙すべし

替笠行露、伴蓑釣煙 笠に替へ露を行ひ、蓑に伴ひ

煙を釣る

舉頭見此、何知有天^⑤ 頭を擧げて此を見れば、何ぞ

天有るを知らん

『日本國志・禮俗志』によると、日本人女性が持つ傘は「傘倣西洋制、名蝙蝠傘、謂張之其翼如蝠也」〔傘は西洋の制に倣ひ、蝙蝠傘と名づく、之を張れば其の翼蝠の如きを謂ふなり〕であつた。『日本雜事詩』第一〇三首自注はまた日本人女性が「出則攜蝙蝠傘」「出づれば則ち蝙蝠傘を攜ふ」と言うから、この舶來の生活用品に黄遵憲が注目していることは明らかである。この詩は「戲作」に屬し、用語も純然たる古風とはいえ、舶來の「蝙蝠傘」に詩を題した以上、黄

遵憲の「奇思異想」の一種の試みとみなしてよからう。

それでは、黄遵憲は日本に滞在した四年餘りの間に、上述の新潮詩人たちとほぼ毎日付き合っており、新しい事物や言葉もほぼ毎日見聞きしていたのに、どうして結局『今別離』のような傑作を書かなかつたのだろうか？ここに私は以下三點の解釋を試みる。

まず、黄遵憲はその『日本雜事詩』定本の自序で言うように、彼は明治維新に對して當然のことながら、認識の深化する過程があつた。初めは傳統漢學の衰亡を危懼し、常々警鐘を鳴らしていたが、やがてそれは時代の流れとして大勢の赴くところを知るまでに至つた。同様に、明治初期の「文明開化新詩」には、若かつた時に「我手寫我口、古豈能拘牽」〔雜感〕と主張した革新派の詩人として、彼は當然深く興味を引かれ、啓發され、試してみたいとさえ思つただろうが、實際に筆を執つて手をつけるには、なお時期を待たねばならなかつた。當時の日本漢學界では、保守勢力が依然として支配的な地位を占めていたので、黄遵憲は「余所交多舊學家、微言刺譏、咨嗟太息、充溢於吾

耳」〔余の交る所は多く舊學家、微言刺譏、咨嗟太息、吾が耳に充溢す〕と述べた。これらの舊學者は明治維新に反感を持ち、漢詩に新しい名詞を混ぜ込むことは下品だとし、非難する聲が多く聞かれた。明治十三年（二八八〇）城井國綱が『明治名家詩選』を編集するとき、その師である村上佛山の最期の願い通りに、故意にこの類の「新詩」を選ばなかった。五年前に森春濤の『東京才人絶句』に對して「耳目の觸るる所、一として新しき題目に非ざるは無し」とできる限り稱揚した川田甕江は、この時もやむをえず口を固くつぐんで、その序文で村上佛山の語を引用した。

近日作者投時好、如氣球・電機・輪船・鐵路、爭入題詠、奇巧日加、忠厚日亡、今而不救、恐有流弊不可勝言者。^⑤

近日の作者時好に投じ、氣球・電機・輪船・鐵路の如きは、争ひて題詠に入れ、奇巧日々に加え、忠厚日々に亡く、今救わずんば、恐らく流弊言に勝ふべからざる者あらん。

黄遵憲も頼まれてこの詩選に序を作ったので、このよう

な悲痛な叫びを聞いて、避けたくならないはずはないだろう。まして前述したように、彼は中國傳統文化の代表として、日本漢詩人にとつては指導的な立場に立つており、「新詩脱口每爭傳」〔新詩脱口すれば毎に爭傳す〕、これらの「爭傳」された「新詩」は、實際に本場の基準と模範を示すものとなり、更には詩壇の綱紀を整える重要な役割を果たした。彼が波のまにまに流れのまにまに、世俗が稱讃する「奇巧」の行列に入ってしまったら、或いは彼の傳統の守護者としてのイメージをけがすことになったかもしれない。ただし、英國に行つた後は、彼にはもちろんこんな餘計な顧慮は要らなかつた。

次に、黄遵憲は西洋文明の事物そのものに對して、咀嚼して消化する必要があつた。日本はあくまでも中國と同じくアジアに屬するので、ここで見聞した事は、結局ただの乗り換え販賣の「中古品」でしかなく、本當の歐米文明を理解するには、以後の彼自身の經驗を待たねばならなかつた。そもそも、地球の東西時差のような「國際知識」は、身をもつて體驗しないと、はっきりと感得することができ

ないだろう。

それから、黄遵憲の作詩に慎重な態度も、彼に輕率な創作活動を許さなかつただろう。「公度詩自命另開一新面目、最不肯輕易落筆。」〔公度の詩、自ら命じて別に一の新面目を開かんとし、最も輕易に落筆を肯ぜず。〕黄遵憲は宮島誠一郎への書簡において、その作詩をぜひ推敲するよう再三言いつけた。『四庫目』論陸放翁、譏其作詩太多、故傷冗濫、通人當知其意、無俟僕喋喋也。④『四庫目』陸放翁を論じ、其の作詩太多、故に冗濫に傷むを譏る、通人當に其の意を知り、僕の喋喋するを俟つこと無かるべし。』『今別離』四首は、正に長期間を経て育み、ついに成熟したもので、想像力が豊かで、古きをもつて新しきと爲し、眞に迫る描寫に成功している。これを明治諸公と比べると、見事に恩返しをするとともに、先輩を追い越したと言えるだろう。

包み隠さず言うならば、黄遵憲の新體詩は必ずしもまったく最高峰に達していて、一分の隙もないというわけではない。錢鍾書の『談藝錄』は黄遵憲の缺點についてこう批判した。「差能說西洋制度名物、掎摭聲光電化諸學、以爲

點綴、而於西人風雅之妙、性理之微、實少解會、故其詩有新事物、而無新理致。⑤「やや能く西洋の制度名物を説き、聲光電化の諸學を掎摭し、以て點綴と爲す、而れども西人風雅の妙、性理の微に於いては、實に解會少なく、故に其の詩に新事物あれど、新理致無し。」残念ながら、二十世紀以來古典詩自體の全面的衰退が明らかになる中で、どのようにしたら、「新理致」を確實に自分のものにし、自由自在に表現できるのか、この問題はずっと存在し、恐らく今後も良い解決に至ることができないであろう。當然ながらこれは既に別の範疇の話になるのである。

明治前期、清國駐日使館の何如璋、黄遵憲及び後任の黎庶昌を代表とする使臣たちは、日本人との唱和往來、添削評點を通して、明治漢詩壇に一定の影響を與えた。これについては研究者はすでにある程度の論述をしている。しかし逆に彼ら自身も多かれ少なかれ明治漢詩から影響を受けたことについては、未だ注目されていないようである。本稿は黄遵憲と日本漢詩の關係の總合的に論じた上で、この問題に對して一つの初步的な探討をただけであり、切に

識者の教えを請うものである。

註

- ① 管見によれば、これに言及している論著は次のようである。
陳捷『明治前期日中學術交流の研究』、汲古書院、二〇〇三年版。王寶平『清代中日學術交流の研究』、汲古書院、二〇〇三年版。單篇の論文は未だ見えていない。
- ② 林香奈『「日本雜事詩」における日本漢詩に關する記述について』、『紀念黃遵憲逝世一百周年國際學術討論會論文集』、中國社會科學近代史研究所編、二〇〇五年、一三五頁。『日本詩史・五山堂詩話』、『新日本古典文學大系六五』、岩波書店、一九九一年版、五二九頁を參照。
- ③ 『今四家絕句』卷頭、富士川英郎ら編『詩華集・日本漢詩』第十一卷、汲古書院、一九八四年版、六頁。
- ④ 陳錚編『黃遵憲全集』（上）、中華書局、二〇〇五年版、二九五頁。以下『全集』とする。
- ⑤ 『全集』所收「庚辰筆話」第一〇一話、六三四頁。
- ⑥ 鍾叔河輯註『日本雜事詩廣註』、湖南人民出版社、一九八一年版、一二六頁。
- ⑦ 『全集』二四九頁。
- ⑧ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七七五頁。
- ⑨ 『全集』所收「與岡千仞等筆談」、七九一頁。
- ⑩ 上同、七八八頁。

黃遵憲と日本漢詩（蔡）

- ⑪ 『全集』一二九—一三〇頁。
- ⑫ 『全集』二六一頁。
- ⑬ 『全集』所收「致岡千仞」、三二六頁。
- ⑭ 『全集』所收「己卯筆話」第八八話、六九〇頁。
- ⑮ 『全集』所收「庚辰筆話」第二八話、七〇四頁。
- ⑯ 『全集』所收「己卯筆話」第八八話、六九四頁。
- ⑰ 『全集』三四四頁。
- ⑱ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七二二頁。
- ⑲ 『全集』所收「中學習字本序」、二四一頁。
- ⑳ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七五五頁。
- ㉑ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七六七—七八八頁。
- ㉒ 『全集』二六一頁。
- ㉓ 『全集』所收「己卯筆話」第八八話、六九二頁。
- ㉔ 『全集』三〇三頁。
- ㉕ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七二八頁。
- ㉖ 上同、七六九頁。
- ㉗ 『全集』所收「與岡千仞等筆談」、七八九頁。
- ㉘ 上同、七九一頁。
- ㉙ 『全集』所收「與宮島誠一郎等筆談」、七三九頁。
- ㉚ 上同、七六〇頁。
- ㉛ 『全集』所收「己卯筆話」第八八話、六九〇頁。
- ㉜ 『全集』二九七頁。
- ㉝ 『全集』三二二頁。

- 『全集』三一八頁。
- ③④ 『飲冰室文集』四十五（上）「詩話」、『飲冰室合集』第五冊（中華書局一九八九年）、二頁。
- ③⑤ 錢仲聯『入境廬詩草箋注』（上）『今別離』注に引用、上海古籍出版社、一九八一年版、五一七頁。
- ③⑥ 『全集』所收『己亥雜詩』第一首、一五三頁。
- ③⑦ 錢仲聯『入境廬詩草箋注』（下）に引用、上海古籍出版社、一九八一年版、一二八二頁。
- ③⑧ 森春濤編『東京才人絶句』、明治八年（一八七五）刊行、一頁。
- ③⑨ 川田甕江『讀新文詩』、森春濤編『新文詩』第一集、明治八年（一八七五）刊行、一頁。
- ④① 阪谷朗廬『贈春濤老人』、『新文詩』第一集、明治八年（一八七五）刊行、一一頁。
- ④② 『新文詩』第五集、明治九年（一八七六）刊行、九頁。
- ④③ 『新文詩』第四集、明治十年（一八七七）刊行、七頁。
- ④④ 杉山三郊『送春濤先生游新潟序』、『新文詩別集』第一四號、明治十四年（一八八二）刊行、四頁。
- ④⑤ 『春濤詩鈔』卷十五『新潟竹枝』、富士川英郎等編『詩集日本漢詩』第一九卷、汲古書院、一九八九年版、一二六一—二八頁。
- ④⑥ 『新文詩』第二二集、一頁。
- ④⑦ 黃遵憲『日本國志敘』、上海古籍出版社、二〇〇一年影印
- 版、二頁。
- ④⑧ 『新文詩』第四二集、明治十一年（一八七八）刊行、六頁。
- ④⑨ 『全集』所收『戊寅筆話』第一七〇話、六八〇頁。
- ⑤① 黃遵憲『與森希黃』、『新文詩』第六二集、明治十三年（一八八〇）刊行、一〇頁。ただし、この文章は『全集』に收められていない。
- ⑤② 王寶平編『晚清東遊日記彙編——日本國志』第一種『中日詩文交流集』、上海古籍出版社、二〇〇四年影印版、七一頁を参照。
- ⑤③ 小野湖山『題張副使彤管生輝次韻詩後』、『新文詩』第五六集、明治十二年（一八七九）刊行、二頁。
- ⑤④ 『走向世界叢書』所收、何如璋等『甲午以前日本遊記五種』、岳麓書社、一九八五年版、一四八頁。
- ⑤⑤ 『走向世界叢書』所收、何如璋等『甲午以前日本遊記五種』、岳麓書社、一九八五年版、一二五頁。
- ⑤⑥ 『全集』所收『與宮島誠一郎等筆談』、七三二頁。
- ⑤⑦ 『全集』所收『戊寅筆話』第一五九話、六六五頁。
- ⑤⑧ 『日本雜事詩自序』、『全集』六頁。
- ⑤⑨ 城井國綱編『明治名家詩選』卷首、明治十三年（一八八〇）刊行。
- ⑥① 黃遵憲『奉命爲美國三富蘭西士果總領事留別日本諸君子』、『全集』一〇五頁。
- ⑥② 潘飛聲『在山泉詩話』、錢仲聯『入境廬詩草箋注』（下）に

引用、上海古籍出版社、一九八一年版、一二七八頁。

⑥1 『全集』三〇八頁。

⑥2 錢鍾書『談藝錄』（補訂本）（三）、中華書局、一九八四年版、二三—二四頁。

〔附記〕

本稿はまず二〇〇五年三月下旬北京で開催された中國社會科學院近代史研究所と中國史學會が共催の「紀念黃遵憲逝世一百周年國際學術討論會」で「黃遵憲與明治『文明開化新詩』」と題して、おもに本稿の第三部分を發表した。ついで同年六月上旬臺灣高雄で開催された中山大學が主催の「東方詩話學會第四屆國際學術研討會」で「黃遵憲與日本漢詩」と題し、さらに第一、二部分を加えて發表した。本稿は、高雄での發表原稿をふまえ、加筆を施して成ったものである。二回の發表の際、多くの方々から教示をいただき、特に北京では林香奈氏、高雄では和田英信氏から貴重な意見を賜ったので、この場を借りて感謝したい。なお、成稿にあたっては氏岡眞士氏にも多大な助言をいただいた。あわせて御禮を申し上げる。